

## 長安の太清觀の道士とその道教 —— 史崇玄と張萬福を中心に

土屋 昌明

### はじめに

唐代長安の道教の状況を考えるうえで、則天武后から中宗・睿宗、そして玄宗が即位するころまでの時期は、史料の少なさと複雑な政情があいまって、不明な点が多い。本稿では、玄宗即位の直後におこなわれた、道教經典に対して音義を加える事業に参加した道士とその所属道觀を考察する。それによって、この時期における長安の道教の状況を認識しようとするものである。この事業は玄宗直轄でおこなわれたから、これに参加した道士とその所属する道觀は、この時期の道教において最重要の地位にあったとみてよい。

この音義は『一切道經音義』と称され、玄宗「一切道經音義序」によれば、凡そ一四〇卷だったが、現在には伝わっていない。そのほかに、道士の史崇玄（史崇とも）の『一切道經音義妙門由起』六篇があり、これは『道藏』の同巻に伝わっている。そこに載っている史崇らの「妙門由起序」には、この事業に参加した官僚と道士の役職と名前が列挙されている。そのうち道士はつぎの者たちである（便宜的に道士名を太字にする）。

金紫光祿大夫鴻臚卿員外置同正員上柱國河内郡開國公太清觀主臣**史崇**……大德京太清觀大德**張萬福**、大德**劉靜儼**、

大徳田君楷、大徳阮孝波、京玄都觀主尹敬崇、大徳京東明觀主寇義待、大徳京太清觀法師孫文僂、大徳時居貞、大徳單大易、大徳高貞一、大徳張範、大徳田克勤、大徳范仙厦、大徳宗聖觀主侯元爽、大徳東都大福唐觀法師侯抱虛、上座張至虛、劉元良、大徳絳州玉京觀主席抱舟。

彼らに関して、中国社会科学院歴史研究所の雷聞氏が詳細な論文を書いている。この論文では、史崇とその太清觀に関して詳しく論じているほか、尹敬崇・寇義待・張萬福・阮孝波・孫文僂・范仙厦といった道士および彼らが所属した宗聖觀・福唐觀・玉京觀などの道觀について史料をあげて述べている。これらに関する史料は、雷聞氏のこの論文でとりあげられているものがほとんどすべてであり、本稿で付け足せることは多くない。またこれらは、長安の道觀と道士の活動を叙述しようとする研究で基本的な史料となる。なかでも、太清觀の道士である史崇玄と張萬福はとくに重要である。この二人について私は、部分的に雷聞氏と解釈を異にする見解をもっている。そこで本稿では、史崇玄と張萬福を中心に述べることとする。

また、『一切道經音義』編纂について、雷聞氏はその政治的背景を論じ、つぎのような議論をしている。

史崇らの「妙門由起序」には、道士のほか、十三名の昭文館学士と九名の崇文館学士の名前があがっている。前者の多くは太平公主の腹心およびもと睿宗の藩邸の人物であり、後者の多くは玄宗の支持者である。また、道士十九名のうち、十二名が太平公主に由来する太清觀の道士である。これは、この時期に太平公主と玄宗の権力闘争が一触即発の状態になっていたことの反映である。玄宗が『一切道經音義』の編纂を企てたのは、表面的には太平公主一党をたてて慰安しつつ、みずからの皇帝権力を脅かす恐れのある敵陣営の情報を探ろうとしたためである、と。

この意見は、『一切道經音義』編纂の背景を当時の権力闘争から解釈したもので、相応の可能性を備えている。ある意味では、玄宗のこの事業の裏の部分を指摘したものである。しかし、伝世の道教經典に音義を加えるという事業の表の部分が指摘されていない。それは宗教的な背景である。太平公主と玄宗とは、権力闘争の側面では対立しつつ

も、宗教的な側面では共同せざるを得ないような事情も存在していたと私には思われるのである。

## 一 太清観について

『一切道經音義』編纂事業に参加した道士の代表である史崇玄および張萬福は、太清観の道士とされていた。そこでまず太清観について整理しておく<sup>3)</sup>。

太清観は、もともとは頒政坊にあった道観である。『長安志』巻七につきのようにある<sup>4)</sup>。

次南大業坊。本名宏業。神龍中、避孝敬皇帝諱改。東南隅、太平女冠觀。本宋王元禮宅。儀鳳二年、吐蕃入寇、求太平公主和親、不許。乃立此觀、公主出家為女冠。初以頒政坊宅為太平觀、尋徙於此。公主居之、其頒政坊觀改為太清觀<sup>5)</sup>。

これによれば、儀鳳二年（六七七）の吐蕃との紛争によって、太平公主を人質として吐蕃にいれることをさけるために、大業坊に太平女冠観を立て、太平公主をその女性道士ということにした。太平公主は高宗の娘で、母は則天武后である。太平公主は太平女冠観に入る前、もとの頒政坊の邸宅を太平観としていた。太平公主が移転後、それを太清観としたのである。つまり太清観は、もともと太平公主ゆかりの道観だったのである。これによれば、太清観の設立は六七七年以降である。

『舊唐書』卷一九一「方伎伝」（中華書局校点本五〇九九頁）では、李嗣真という者が太清観で章懷太子作の「宝慶楽」を演奏し、その曲の「哀思不和」に驚いたが、数日後、章懷太子は則天武后から謀反の嫌疑をうけて庶人に廃された、という話がみえる。これは調露二年（六八〇）のことである。したがって、六八〇年にはたしかに太清観とい

われていたことになる。

ところで、頒政坊に太平觀を立てたのはいつであろうか。つぎの『長安志』卷十（二二九頁）によると、それは咸亨元年（六七〇）だという。

次南頒政坊……西北隅、昭成觀。本楊士達宅。咸亨元年、太平公主立為太平觀、尋移於大業坊、改此觀為太清觀。高宗御書飛白額。至垂拱三年、改為魏國觀。載初元年、改為大業崇福觀。武太后又御書飛白額。開元一十七年為昭成太后追福、改立此名<sup>6</sup>。

これによれば、咸亨元年（六七〇）に太平觀を立てたあと、太清觀に改めた。高宗の御書の飛白書の「太清觀」という額がかけられたという。前掲の『舊唐書』卷一九一で李嗣真が太清觀で章懷太子作の「宝慶樂」を演奏したこととあわせ考えれば、おそらく太清觀は、太平公主が出たあと、皇族のための道觀とされたのである。その後、垂拱三年（六八七）に魏國觀と改められ、載初元年（六九〇）に大崇福觀と改められた。則天武后から飛白書の額がさづけられた。開元十七年（七二九）に昭成太后（玄宗の母親）の追福ために昭成觀とされた<sup>7</sup>。

『新唐書』卷八三（中華書局校点本三六五〇頁）「太平公主伝」にはつぎのようにある。

太平公主、則天皇后所生、后愛之傾諸女。榮國夫人死、后丐主爲道士、以幸冥福。儀鳳中、吐蕃請主下嫁、后不欲棄之夷、乃真築宮、如方士薰戒、以拒和親事。

これによれば、太平公主が道士になったのは、榮國夫人（則天武后の実母）が亡くなって、則天武后が娘にその追福のお勤めをさせるために太平觀を立てたのである。『舊唐書』卷一八三（四七二八頁）によると、榮國夫人が亡くなっ

て則天武后は悲しみ、栄国夫人が寵愛していた武敏之に仏像を作って追福させようとした。また、『唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳』によると、則天武后は栄国夫人の成仏のための功德として、宅を喜捨して太原寺を建てた。つまり則天武后は、栄国夫人の死後の安寧のために、道教と仏教の両者の法力をもとに求めたのであり、その意味で太平観と太原寺は同一の目的で建てられたわけである。同書によれば、栄国夫人は咸亨元年（六七〇）に亡くなったとあるから、この説は『長安志』巻十の頒政坊にみえる年次と合致する。なお、『長安志』巻十（二三七頁）によれば、太原寺はその後、垂拱三年（六八七）に魏国寺と改められ、載初元年（六九〇）に崇福寺と改められ、則天武后から飛白書の額をさずけられたとあり、太平観と同様な改名のプロセスをたどる。つまり太平観と太原寺の名称の変更は相関している。したがって、両寺観の役割と名称の変更は、栄国夫人ないし皇族の追福に関係していることが想定される。

以上のことから、太清観は太平公主の幼少期の入道経験とゆかりのある道観であること、『一切道経音義』の序が書かれた先天元年（七一二）ころには、頒政坊の太清観は、大崇福観という名称になっていたことがわかる。ところで『長安志』巻十（二三八頁）にはつぎのようにある。

次南、金城坊。……東南隅、開善尼寺。……寺北、廢太清観。本悖逆庶人宅。初封安樂公主、出降武三思子崇訓、誅後、自休祥坊移宅於此。改適武承嗣之子建秀、及誅後、勅太清観道士史崇玄居焉。崇玄以先天二年謀逆伏法。其観遂廢。

これによれば、金城坊の東南隅にあった開善寺の北（頒政坊の西対面）に安樂公主が休祥坊（金城坊の北面）からうつった。ところで安樂公主は、七一〇年六月、韋后らと謀って中宗を毒殺したとされる。太平公主と李隆基（玄宗）らは、そののち安樂公主らを誅した。右の『長安志』巻十によると、史崇玄は、「悖逆庶人」（安樂公主）が七一〇年

に李隆基（玄宗）に誅殺されたあと、彼女の邸宅が道観に改築され、そこに入ったのである。休祥坊の彼女の邸宅は壮麗を極めていた<sup>10</sup>というから、それを改築した太清観も壮麗な建築だっただろう。これは、太平公主が史崇に委託したものと思われる。したがって、金城坊の太清観は、七一〇年六月以降に設けられたのである。

以上をまとめると、太清観はもともと太平公主にゆかりのある道観として、六七七年から皇族に使われていたが、この名称は一時途絶え、太平公主と玄宗による安樂公主と韋后の排除のあと七一〇年六月直後に復活し、場所をうつして、もとの太清観の西向かいにある、もと安樂公主宅の壮麗な建物がそれにあてられ、史崇玄に預けられた。そして七一三年七月に太平公主のクーデター失敗とともに廃止されたのである。

## 二、史崇玄について

その太清観に入った道士の史崇玄は、太平公主と密接な関係があった。史崇玄が頭角をあらわしたのは、神龍二年（七〇六）に五品が贈られたころからである。『資治通鑑』卷二〇八（中華書局校点本六五九八頁）にはこうある。

（神龍二年二月）丙申、僧慧範等九人、並加五品階、賜爵郡縣公、道士史崇恩等加五品階、除國子祭酒同正。

同じ記事と思われるものを『舊唐書』卷七（一四一頁）ではつぎのように書いている。

丙申、僧會範、道士史崇玄等十餘人授官封公、以賞造聖善寺功也。

これにより、『資治通鑑』でいう「史崇恩」は「史崇玄」のことであり、聖善寺を建設したことの功績による昇格だと

わかる。これについて、仏教側の資料では、會範（慧範・惠範）以下の人物が明示されている。『佛祖歷代通載』卷二二につきのようにある<sup>11</sup>。

唐中宗神龍二年、造聖善寺成、惠範、惠珍、法藏、大行、會寂、元壁、仁方、崇先、進國九人、加五品並朝散大夫。蓋以營像修造之功也。

したがって、『舊唐書』でいう「十餘人」のうち、九人は仏僧であったことがわかる。ということとは、史崇玄のほかに道士が数名参与していたかもしれないが、詳しくはわからない。僧たちは、仏像を建立した功績で官職を贈られた。また『資治通鑑』卷二〇八（六六一―六頁）につきのようにある。

（神龍二年九月）銀青光祿大夫、上庸公、聖善中天西明三寺主慧範於東都作聖善寺。

胡三省注によると、聖善寺という名称は則天武后を追善するためのものだという<sup>12</sup>。宋の陳思の『書小史』卷一につきのようにある<sup>13</sup>。

中宗嘗為武后追福脩聖善寺。制度奇麗、為都城之最。寺内立碑、中宗製文、睿宗書之。

中宗が母親である則天武后のために建てたこの寺は、設計が洛陽でもっとも綺麗だったという。中宗みずから記念碑の文を作り、むすこの睿宗がこれを書いた、という力の入れようである。したがって、相当の経費がかかっているであろう。この建設事業には、太平公主も関わっていたようである。『大宋僧史略』卷中につきのようにある<sup>14</sup>。

唐太平公主奏胡僧慧範為聖善寺主。仍加三品封公爵。

太平公主が聖善寺の建設に関わった僧慧範を寺主にすることを奏上しているのである。この慧範は、「胡僧」つまり西域の僧とされており、『資治通鑑』巻二〇八（六五八五頁）では「妖妄を以て権貴の門に遊ぶ」「左道を執りて以て政を乱す」という。『資治通鑑』の司馬光のことだから、慧範のような人物は特に悪く書くのであるうが、貴顕が悦ぶようなならんかの特殊技能をもっていたものと思われる。史崇玄は、このような胡僧とともに、太平公主から寵愛を受けたのだと考えられる。史崇玄の人物について、同時代人である張鷟（六五八？～七三〇）の『朝野僉載』につきのようにある<sup>15</sup>。

唐道士史崇玄、懷州河内縣縫靴人也。後度為道士、矯假人也。附太平為太清觀主。金仙玉真出俗、立為尊師。每入内奏請、賞賜甚厚、無物不賜、授鴻臚卿、衣紫羅裙、帔幄象笏、佩魚符、出入禁闈、公私避路。神武斬之、京師中士女相賀出。

これによれば、史崇玄はもと靴職人だったのが道士となった。太平公主にとりいって太清觀主となった。『冊府元龜』によれば、彼が太清觀主となったのは景雲二年（七一一年）正月である<sup>16</sup>。そして、金仙・玉真の二公主が出家して女性道士となるにあたっては、入道の師となった。これについて、『一切道經音義妙門由起』序にも登場する太清觀道士張萬福の『傳授三洞經戒法籙略說』につきのようにある<sup>17</sup>。

竊見、金仙玉真二公主、以景雲二年歲次辛亥春正月十八日甲子、於大内歸真觀中、詣三洞大法師金紫光祿大夫鴻臚卿河内郡開國公上柱國太清觀主史尊師受道。



これにより、金仙公主と玉真公主が史崇玄を師として入道したのは、景雲二年（七一）正月のことであるとわかる。史崇玄が太清觀主になったのも同じ景雲二年正月であったから、この両者は関係があるとみてよい。史崇玄が太清觀主となったのは、金仙・玉真二公主を入道させるための、太平公主による人事だったと想像される。

『朝野僉載』によれば、その後、史崇玄の権勢は極点に達した。彼は入内するたびに、賜り物をたくさんもらった。これはおそらく太平公主からの賜り物なのであろう。鴻臚卿という皇城内の役職を授かり、紫衣をきて象牙の笏を持ち、宮人しかもてないはずの魚の形の玉符を帯びていた。彼が宮中に入入りする際には、人々はみな道をよけた、という。

景雲元年（七一〇）以来、金仙公主のための金仙觀と、玉真公主のための玉真觀を建設するにあたって、日に一万人もの建設労働者を管理する仕事を詔によって史崇玄が担当していた<sup>18</sup>。これは、このまゝに聖善寺の建設における実績がかわれたものと思われる。明の楊慎の『丹鉛餘録』「総録」卷十一につきのようにある<sup>19</sup>。

又曰、太宗造福先寺、中宗造聖善寺、上皇造金仙玉真觀、皆費巨萬。蠹生靈凡、諸寺觀宮殿請止絶建造可乎。

つまり、聖善寺の建設が経費のかかったものであったのと同様に、金仙觀・玉真觀の建設もそれに匹敵し、建設労働にかりたてられた人々の反感を買っていたとみていえるのは正しいであろう。

金仙・玉真二觀の建設に対し、儒官が強烈に反対したのは詳しく研究されている<sup>20</sup>。それだけでなく、仏僧らも反対運動をおこなった。仏僧らは、段謙という者をやとって承天門に乱入させ、太極殿にのぼって天子と自称させたいで、逮捕されたからは史崇玄のさしがねだと自白させた。しかし僧によるこの嫌がらせは、史崇玄を陥れることにはならなかった<sup>21</sup>。

これほどの事件を起こしておきながら、実行犯の処分だけで沙汰済みとなったのには、おそらく理由がある。この

事件をおこした仏僧の中心人物が慧範であり、彼に對する太平公主の愛護があつたために事件の中心人物まで追求されなかつたのではなからうか。つまり、それ以前の聖善寺建設では仏教側だけでなく道教側の史崇玄も関わっていたのに、今度の道觀建設では仏教側がメリットにあずかれず、焦燥感をもつた結果の挙ではなかつたらうか<sup>22</sup>。

史崇玄は先天二年（七一三）七月以降に、太平公主のクーデター計画失敗で誅殺された。前掲『朝野僉載』には「神武（玄宗）之（史崇玄）を斬り、京師中の士女は相賀して出づ」とあり、人々が史崇玄を憎んでいたことをあらわしている。それは、上層部で権力をほしいままにしていただけでなく、二回にわたる大がかりな建設労働で、人々に過酷な仕事を課したためでもあつただろう。こうして史崇玄の居宅だつた場所は廃止され、その居宅跡は再利用されず、前掲『長安志』卷十にあるように「廢太清觀」といわれたのである。

史崇玄の著作について知られるところは多くないが、ここでまとめておきたい。

明の『道藏』に『一切道經音義妙門由起』一卷がある。本稿冒頭で言及したように、その巻頭の玄宗序によれば、道士および学士に討論をさせて『一切道經音義』一四〇巻を作らせたという。それに続く史崇らの序文では、『一切道經音義妙門由起』六篇および經目と舊經目錄あわせて一一三巻という。南宋の鄭樵『通志』卷六七に「一切道書音義序一卷、唐道士史崇與學士崔湜薛稷等撰」とあり、この一卷本の序文が単行していたことがわかる。また、『新唐書』卷五九（一五二〇頁）には「道藏音義目錄一百一十三卷、崔湜、薛稷、沈佺期、道士史崇玄等撰」とあり、この本が北宋までは伝わっていたことがわかる。それゆえ、北宋の元豐甲子歲（一〇八四）の自叙がある陳景元『南華真經章句音義』卷一三に、史崇の『藏經音義』（『一切道經音義』の別名であろう）の引用があり、同じく陳景元の『上清大洞真經玉訣音義』には「史崇曰く」という引用がある。これは、いまみることでできない『一切道經音義』の貴重な残文だと考えられる。これについては、吉岡義豊氏の『道教經典史論』でまとめられている<sup>23</sup>。このほかに、『舊唐書』卷四七に「十二次二十八宿星占十二卷、史崇撰」という著述がみえるが、どのようなかはわかっていない<sup>24</sup>。

### 三、張萬福について

つづいて、道士の筆頭にあがっている張萬福についてみてみよう。<sup>25</sup> 便宜上まず彼の著作を一覧しておこう。「  
内は文物出版社『道蔵』の冊番と頁。張萬福の所属道観がわかる場合は書きいれておく。

- ① 『三洞衆戒文』「3-396」太清観道士
- ② 『三洞法服科戒文』「18-228」太清観道士
- ③ 『洞玄靈寶道士受三洞經誡法錄擇日曆』「32-182」清都観道士
- ④ 『無上黄籙大齋立成儀』「9-378」清都観三洞法師
- ⑤ 『洞玄靈寶三師名諱形状居觀方所文』「6-754」太清観道士
- ⑥ 『洞玄靈寶無量度人經訣音義』「2-527」
- ⑦ 『醮三洞真文五法正一盟威籙立成儀』「28-492」
- ⑧ 『伝授三洞經戒法錄略説』「32-184」
- ⑨ 『洞玄靈寶度人經大梵隱語疏義』「2-519」
- ⑩ 『靈宝五鍊生尸齋儀』

一部、説明を要するものがある。

④は、卷一では「三洞法師冲靖先生留用光傳授、太上執法仙士蔣叔輿編次」となっているが、卷十六では「東晉廬山三洞法師陸修靖撰、大唐清都三洞法師張萬福補正、上清三洞法師李景析集定」とある。つまり複数の著書がとりまれているようである。文中で張萬福の名前に言及している部分も少なくなぐ、卷一、二、九、十六、十七、三二、

三三に引用がある。その場合、名前だけの場合が多いが、「清都張萬福天師齋儀」「西京清都觀張萬福天師儀範」などと記す場合もある。したがって④は、張萬福の原著名はわからないが、それが大きくとりこまれた著書なのである。このような引用は、杜光庭の『太上黃籙齋儀』などにもみえており、おそらく杜光庭の儀礼書における張萬福の引用・参照から継承しているであろう。

⑨は、『道蔵』では撰者を明記していないが、明の『道蔵目錄詳注』では張萬福の撰とし、福井康順氏の『靈宝經の研究』以来、張萬福の撰と推定されており、拙稿でもそれを踏襲しているが<sup>28</sup>、異説がないわけではない<sup>29</sup>。

⑩は、『五鍊經』（『道蔵』の『太上洞玄靈寶滅度五鍊生戸妙經』）による儀礼の解説書であることが、南宋の蔣叔興編次『無上黃籙大齋立成儀』巻十六にみえる題名と引用文から知れる<sup>30</sup>。④にみえる張萬福説の引用の一部は、この本と関連すると思われる。

張萬福の所屬先の道観について、『一切道經音義妙門由起』および著作①②⑤では太清観としており、前述のように、太清観が経営されていたのは七一〇年後半から七一三年七月のあいだであるから、これらの著作もこの三年間の成書となる。しかし③④では清都観と記している。そうすると、張萬福が清都観で③④を撰したのは太清観の三年間より前か後かという問題が生じる。これについて雷聞氏は、張萬福が清都観にいたのは太清観より後だとみている。それゆえ、③は史崇玄ら太平公主の一派と玄宗の政治闘争が終結したあとの著作とみて、③で批判されている符章や禁呪を得意とする道士として張萬福の脳裏にあったのは、玄宗の側にいた葉法善ではないかという拙稿の推測<sup>31</sup>に反対している<sup>32</sup>。つまりこの問題は、張萬福の記録が、どのような時代背景と関わるかを考える上で重要なのである。とくに当時は、太平公主と玄宗の間の情勢が複雑に展開していた時期でもある。張萬福の脳裏に葉法善があったかどうかは、こうした情勢も考慮しなければならないから、ひとまず③が太清観より前か後かという問題についてのみここで考えておきたい。

まず①～⑩の著作で、紀年があるのは⑧だけで、これは金仙と玉真の先天二年（七二三）の受道の模様を詳細に記

しており、その書きぶりからみて直後の成書だと思われる。つまり、太清観の後、開元年間の紀年の著作は存在しない。つぎに、張萬福は太清観で史崇の直下にいた道士の代表であるから、史崇の誅殺に連座したか、あるいは長安からの追放、軽微でも要職からの罷免は免れないのではないかと想像される。したがって、張萬福が生存していたとしても、どれほどの執筆意欲と指導力をもてたか疑問である。ところが、清都観道士の署名がある③の『洞玄靈寶道士受三洞經誡法籙擇日曆』を太清観以後に書かれたと仮定すると、本書にはそんな状況は微塵も感じられない。雷聞氏も引用しているつぎの一節をみてみよう。

萬福仰惟、積善慶及庸微、既厠道流、又參眞祕。自升淨域、向五十許年。從師結誓、亦四十餘載。敢窺瓊檢、竊誦金章。香燈之暇、輒此撰錄。祇望示之門人未敢聞之于外。

「わたくし張萬福が思うに、父祖の積んだ善徳がわたくしごとく凡庸な者にも及び、道士の一員となつて、道教経典を参究してきた。道観に入つて以来、五十年にもなる。尊師について位階を受けてからでも四十数年である。この間、道教経典を瞥見し朗誦してきた。そこで、勤行のいとまに本書を撰した。まだほかで本書の内容を学んでいないような門人に教示できれば望外である」。ここには、勤行に励むベテランが門人に指導する自信に満ちた口吻が感じられる。たしかに晩年の著作であるとおぼしいが、このような態度と指導の資格を、挫折後の失意のもとで維持できるものだろうか。

この文によれば、張萬福は道士の家に生まれたらしく、幼少から道観に入っていた。「淨域」は道観のことであるから、それから五〇年、「從師結誓」を最初の位階を受けたことだとして、それから四〇年以上になる。そうすると、五歳前後で道観に入り、十五歳前後で正一位を受けたのであろう。そうすると、この③の時点で五五歳前後ということになる<sup>33</sup>。これを太清観に入る直前とすると、太清観に入つた時期は五十年代後半となり、当時としては高齢である。

参考に、張萬福とともに音義の制作に関与した孫文備の事例をみておこう。彼の墓誌銘「東明觀孫思墓誌」などによつて<sup>34</sup>、孫文備の事跡を略年表にするとつぎのようになる。

永徽二年（六五一） 生まれる。

乾封二年（六六七） 十六歳で勅を奉じて入道し東明觀に住した。

長寿年間（六九二〜六九三） 四川の青城山で上清位までの法籙をすべて受けおわった。

万歳通天元年（六九六）四月 勅を奉じて洛陽の明堂で則天武后に御進講。

万歳通天二年（六九七） 勅を奉じて泰山にて行事（おそらく金籙齋）、天尊像と二真人像を造る<sup>35</sup>。

景龍二年（七〇八）四月 勅を奉じて甘露殿（長安城宮城の内廷の奥の殿堂）で仏道の優劣を仏僧と議論。

景龍三年（七〇九）二月 勅を奉じて太白山と昆明池で金竜玉璧を投げる儀礼（投龍簡）。

景雲元年（七一〇）八月 勅を奉じて嵩山と北邙山老君廟で金籙齋などを挙行。

先天二年（七二三）十月九日 東明觀で亡くなる。享年六十三歳。

孫文備が太清觀に入ったのは七一〇年後半で、六十歳ころであるから、張萬福が五十代後半で太清觀に入ったのは決して例外ではないことがわかる。

孫文備の道教生涯は、東明觀に始まり東明觀に終わっている。つまり彼のアイデンティティは東明觀にあった。彼は則天武后の信任を得て、中宗・睿宗・玄宗もそれを継承している。おそらく景雲元年八月の嵩山と北邙山での祭事も、中宗の崩御（同年六月）に関連したものと推測される。彼はこのように皇帝権力に親近した道士であり、中宗の崩御に関わる法事をおこなった直後から太清觀に入ったと思われる。

このような赫赫たる経歴をもち、仏道論争でも活躍できるような道教学理を備えた孫文備ですら、『一切道經音義妙

門由起』の序文では、張萬福の下位に置かれている。であるから、かりに史崇玄や太平公主の引き立てがあったとしても、張萬福の道学の業績は、太清觀に招かれた段階ですでに非常に優れたものでなければならぬ。したがって張萬福の道学は、太清觀に入る前に成就していたのであり、それが清都觀だったと考えるべきではなからうか。そうすると、彼のアイデンティティも清都觀にあった可能性が高いと思われるのである。

ただし、清都觀道士の肩書きが太清觀廃止以後の可能性もないことはない。執筆時期の決定的な証拠がない以上、状況から判断するしかなく、彼が史崇玄に連座しなかった場合もありうる。たとえば同僚の孫文備は、史崇玄が先天二年七月三日に誅殺された直後、同年十月九日に亡くなっている。それにも関わらず立派な墓誌銘が刻され、赫赫たる経歴が伝えられたということは、史崇玄に連座せず済んだことを意味する。つまり、太清觀の道士で史崇玄に協力した道士でも、必ずしも連座して処罰されたわけではないのである。したがって、張萬福もその一人だった可能性まで否定することはできない。ただし、その蓋然性は低いとみるべきである。

#### 四、清都觀について

張萬福は清都觀で研鑽を積んだと考えられるので、つづいて清都觀について整理しておこう。この道觀は、永樂坊にあった。『長安志』卷七（一七〇頁）につきのようにある。

次南永樂坊。……縣東清都觀。隋開皇七年道士孫昂為文帝所重、常自開道、特為立觀。本在永興坊、武德初徙於此地。本隋寶勝寺。

清都觀は、隋の開皇七年（五八七）に文帝が道士の孫昂のためにつくった道觀で、そのもとの場所は永興坊だったの

を、武徳初に隋の宝勝寺を道観に改築して清都観とした、という。東側には、景龍三年（七〇九）に中宗が永壽公主のために永壽寺を建てた。坊内の北側は、隋の開皇三年に太保薛国公長孫覽が父親のために建てた資敬寺、はず向かいには興善寺という大きな寺があった。つまり仏寺に囲まれた道観であり、とくにはす向かいの興善寺は当時の仏教界で重要な存在だった。

この道観にはどのような道士がいたのだろうか。『太平廣記』卷七一「竇玄徳」に引く『玄門靈妙記』には、竇玄徳が清都観の尹尊師に法籙を受け、家をあげて奉道するという話がみえる。尹尊師のフルネームは不明だが、長安でこの名字の道士は、終南山の楼観の関係者である場合が多い。楼観は老子が道德経を講じた関令の尹喜にちなんでいるからである。竇玄徳という人は、『唐大詔令集』卷六二に上官儀の「冊竇玄徳司元太常伯文」がみえ、「龍朔二年十月十一日」（六六二）の紀年があるから、これと同時に尹尊師は、七世紀中頃の人、おそらく終南山楼観に関わっており、張萬福のごく幼少期に清都観で尊師の立場にあつたのである。

また、ここには張恵元という道士がいた。貞観二十年（六四六）のはなしとして、『法苑珠林』卷五五につきのよう  
にみえる<sup>36</sup>。

至唐貞観二十年、有吉州囚人劉紹略妻王氏有五岳真仙圖及舊道士鮑靜所造三皇經合一十四卷。……時吉州司法參軍吉辯因檢囚席、乃於王氏衣籠中得之、時追紹略等勘問。云、向道士所、得之受持。州官將爲圖讖。因封此圖及經、馳驛申省奏聞。勅令省官勘。當時朝議郎刑部郎中紀懷業等乃追京下清都觀道士張慧元、西華觀道士成武英等勘問。並款稱云、此先道士鮑靜等所作、妄爲墨書、非今元等所造。

これは、清都観の道士が官憲から「五岳真仙圖」（「五岳真形図」のこと）と『三皇經』の鑑別を依頼され、張恵元と成武英（成玄英）らは、『三皇經』を鮑靜（鮑靚）が作ったものと認めている。この結果、『三皇經』は司直によつて



妖妄と認定されて焚書となった。砂山稔氏によれば<sup>37</sup>、これは、当時の道教界で『三皇經』より『老子道德經』を高める狙いがあったという。だとすると、張惠元も成玄英とともに『道德經』尊重を強調する立場なのであろう。

張惠元は、皇帝の御前での仏教僧との論争を担当する論客としても有名だった。『集古今佛道論衡』巻丁では<sup>38</sup>、張惠元が仏僧との席次を争ったことが伝えられている。

清都観道士張惠元奏云、周之宗盟異姓為後、陛下宗承柱下、今日豎義、道士不得不先。又夷夏不同客主位別。望請道士於先上座。

これは、道士の席次を優先すべき理由として、皇帝が老子の子孫である点と、仏教が外国の教えだという点を張惠元は主張している。同じ『集古今佛道論衡』巻丁の顯慶三年（六五八）冬十一月の論争では、張惠元は「東明観道士」となっている。東明観は顯慶元年（六五六）に建てられた道観で<sup>39</sup>、張萬福とともに音義制作に関わった寇義待も東明観の所屬であり、音義制作当時は観主であった。

張惠元の活動で注目されるのは、中国とインドの文字および発音の相違を問題にしている点である。同上書につきのような問答がある。

道士張惠元問曰、音是胡音、字是唐字。翻胡為唐、此有何益。答曰、字是唐字、音是梵音。譯梵為唐、彼此俱益。又難曰、胡音何能益人。答曰、佛出天竺、梵音為正教。流中夏利見甚多、云何無益。

張惠元は仏僧に質問した。「発音はインドの発音で、文字は漢字だ。インドの言葉を中国語に翻訳してしまつたら、なんの功德があるというのか」。仏僧の答え「文字は漢字だが、発音はインドの発音だ。インドの言葉を翻訳して中国語

にするのだから、インドと中国双方に功德がある」。張惠元の質問「インドの発音がどうして中国の人々に功德を与えられるはずがあるか」。仏僧の答え「仏は天竺にあらわれた。(天竺は世界の中央だから)インドの発音こそ正しい教えだ。それが中国に伝わるのだから、無益なはずがあらうか」。

これは仏教側の資料であるから、道教側代表の張惠元はやりこめられた格好になっているが、仏教経典がサンスクリットの経典を漢字の中国語に翻訳したものである点が問題にされている。張惠元のはじめの批判「音是胡音、字是唐字」とは、たとえば「波羅密」のような原音を音訳した漢語のことをいっている。「胡音何能益人」とは、漢字の意味性を剥奪したサンスクリットの発音そのものの功德を否定しようとするのである。このような批判は、当時の仏教が漢字で音訳した偈呪や梵唄を朗誦し、その神秘的な音声の人々を魅了していたことの反映であらう。

この張惠元の仏教批判は、張萬福の著作と思われる⑨のつぎのような議論を想起させる。

問曰、西域天竺之音多與梵音同、而中國音異、何也。答曰、音故是真文之音耳。道以音化彼、以文化此故也。

質問「西域天竺の音は多く梵音と同じなのに、中国の発音は異っているのはどうしてか」。答え「音はもとより(宇宙とともに生まれた道の顕現である)真文の音声にはかならない。道は発音によって西域天竺を化し、文字によって中国を化したために、そうした相違が生じたのだ」。これは、道が文字となって顕現するに際して音声を伴っており、その音声は梵音といって、サンスクリットの発音と共通していると考えている。つまり世界の中央としてインドに道の顕現があったことを認めたいので、その発音も元来は道の顕現たる文字の音声であるから、文字の教えである道教の方が、音声の教えである仏教より優れている、というのである。この文字を「大梵隱語」といい、張萬福は⑨でこれに注解を加えているのである。

張萬福は、このように仏教の教理を認めつつ、それを道教にとりこみ、それによって仏教を批判する論理を用いて

いる。⑧の『伝授三洞經戒法籙略説』につきのようにある。

夫神道無形、天理遼曠、幽昧不測、言議莫知。若能精至、便即通感、所以令其盡信用質於心也。……世人不悟、遂妄生非毀。外不行功立德、内不洗垢清神、而貪穢滿心、愛憎栖意。徒言入定、躁甚羈縶。唐説淨心、臭踰溷豕。但見坐禪者、毒心彌盛、穢迹逾彰。虚語内修、竟無中實。至於飢寒痛痒、病惱煩怨、不異常人、矯云同俗。吁可悲也。愚人聞余此言、謂之誹謗、吾豈欲銜於言詞、而自陷也。直欲使人釋迷從悟耳。智者幸熟思之、勿役妄也。其所用法信、事畢、並依經散之也。

「世人は（道教の教えを）理解しないまま、みだりに非難をおこす。そして自分は、功德を立てようとせず、内面の垢を洗おうとせず、貪欲と愛憎で心をふさいでいる。いたずらに「入定」ということを言いながら、騒がしいこと群れから離れた猿よりひどい。「淨心」ということを言いながら、臭いこと便所の豚以上である。座禪する者にいたっては、そうした毒のような心をもっと盛んであり、汚らわしい行いはさらに露骨である。「内修」とウソを言い、中身はなにもない。（座禪をしているあいだの）飢えや寒さや苦痛、病氣やイライラなどの身体的精神的な煩いは、凡人とさして変わらないのに、俗人と同じようにしているのだと言い訳する。ああ、悲しむべきことだ。愚人はわたしのこの言葉を聞いて、誹謗中傷と思うかもしれないが、わたしは決して言葉をてらって自分から地獄に墮ちるようなことではない。ただ人々を迷いから解放して悟りに導きたいだけだ。智者はこれを了解して非難しないでもらえれば幸いである。使用した供え物は、儀礼が終われば、すべて経典どおりお下がりとするものである。」

ここで張萬福が批判しているのは、仏教そのものや仏教の教理ではない。仏教者が墮落している様子を嘆いているのである。あるいは、当時の新興宗教ともいうべき禪宗の僧を念頭に置いているのかもしれない。その語りぶりから、張萬福は実際に寺院で仏僧のそうした姿を目撃していたらしいことがわかる。長安という都市そのものがそうである

が、とくに清都観周辺は寺院が密集したなかに道観があり、仏教と道教はごく接近した場所で活動していたし、また仏僧との議論の機会も多い。道士は、そんな空間的にも接近した環境で、自分（道教）と他者（仏教）との差異化とアイデンティティを考えていた。そうした経験が、張萬福の言葉の背後にあるようだ。彼は「言葉をつらっているわけではない」といつているが、「騒がしいこと群れから離れた猿よりひどい」「臭いこと便所の豚以上」といった言い方は、誹謗と言わずして何であろう。これほどの言い方をするのは、おそらく張萬福の思想でも「入定」や「淨心」が重要であって、仏教との相似を認めつつも、仏教の「入定」「修心」などとの差異化をしなければならないからだろう。⑧につきぎのようにある。

經云、思微定志者、令人安神念道、保其身也。思微者、念昔受生之初、神本清淨也。定志者、除諸妄想、絶思惟也。

これによれば、「思微」はみずからの生を受けた当初の清淨無垢な精神状態を冥想する技法であり、「定志」はそれによつて妄想が排除された、人為的な思いを脱した状態に至ることをいうようである<sup>40</sup>。そして、それは「清淨」が特徴である。仏僧を「さわがしい」「汚い」という言葉でいうのは、仏僧も本来は道教と同じく「清淨」であるはずだからである。この観念は当時にあつて一般的な見方であり、道教仏教ともに、實際が「清淨」をはずれると非難された。景雲元年（七一〇）十二月に、金仙・玉真の二公主のために豪華な道観が建設されるとき、諫議大夫の甯原梯が「釋と道の二家は皆な清淨を以て本と為す」といつて、華美な建築を諫めている<sup>41</sup>。

⑧で張萬福が「其所用法信、事畢、並依經散之也」とつけたしているのは、数限りない供え物も、儀礼が終われば、お下がりとして人々に与えるものであるから、仏教と同様に華美な供え物のようにみえるが、そういうものではない、と釈明しているのである。丸山宏氏は、⑧にみえる信物と信者の「心」の関わりに着目し、同じく⑧に『太上老君内

『觀經』が多く引用されていることと結びつけ、張萬福の「心」に対する重視は、隋唐時期に盛行した、「仏教の教理・用語も援用した老子の解釈学を主流とする思想の系列に属する」とみている<sup>42</sup>。このことは、右に検討してきた清都觀の道教と軌を一にする。

このように張萬福は、おそらく終南山の樓觀の道教と関係し、老子と『道德經』の尊重を強調し、長安で仏教寺院と隣接して仏僧の實際生活を目睹でき、仏僧と公開討論をする仏道論争の道教側の道士が住持する、そのような清都觀での經驗と道学を継承しているように思われるのである。

## 結語

『一切道經音義妙門由起』序を起点に、史崇玄と張萬福、そして彼らが所属していた道觀を考察してきた。これにより、『一切道經音義』の事業が当時のきわどい権力闘争のもとにあり、また仏教と道教の激しい相克も含みながら、はなはだ活発な道教実践の一環としておこなわれていたことが認識できた。

きわどい権力闘争について、雷聞氏はこの事業に参与した官僚文人らの素性を調査し、彼らが太平公主と玄宗の陣営に分かれていたことを明らかにした。この点から『一切道經音義』の事業を見ると、すぐに疑問に感じるのは、二手に分かれた勢力を一つにまとめた動機はなにか、という点である。

それは、太平公主と玄宗のあいだで、血縁でつながる親族の死後の安寧、道教の「度人」「鍊度」を願う動機を共有していたからではないかと私には思われる。

第一に、彼らは皇族の死後の安寧を追福する宗教的習慣を引き継いでいた。それは、右にみた道觀や仏寺の設立事情から認識できる。これに対する道教と仏教の奉仕は、則天武后の時代からすでに大がかりにおこなわれていた。たとえば、太子李弘は高宗と則天武后のあいだの息子であるが、彼の病氣平癒祈願には、仏寺として西明寺が顕慶元年

に建てられた。それと同時に建てられたのが、本稿で扱った東明観であった<sup>43</sup>。東明観の「規度は西明の制に倣う」つまり西明寺に準じて設計したのであった<sup>44</sup>。道教は「東」、仏教は「西」で東西対称の名称になっている（ただし所在地点は東西対称ではない）。同一の時期に同様の規格で建てたのであるから、おそらく東明観にも太子李弘の病氣平癒を祈願する狙いがこめられていたと考えられる。

この事情は、本稿で扱った太原寺と太平観の設立と改名のプロセスでも明瞭にみられた。太平公主は、則天武后にならって道教と仏教による親族の死後の安寧をはかったのである。彼女の配下にいた慧範と史崇玄は、ともにその目的に奉仕していた。慧範は則天武后を追福する聖善寺の寺主でもあった。史崇玄が金仙・玉真二公主の入道儀礼をおこなったのは、二公主が道観で則天武后の追福を勤めるためであった。

第二に、この追福の多くが、身内が身内を手にかける殺人の背景をもっていた。それを追福することは、太平公主と玄宗にとつて、横死した者の恨みから逃れて生活を安寧にするだけでなく、李氏皇族による天下国家の治世にも関わる問題である。唐の皇族が道教を尊崇するのは、老子が李氏の祖先であるという血縁関係を主たる根拠としていた。したがって李氏の家内の殺し合いは、死者の恨みをかうだけでなく、老子への尊崇を裏切るものであって、老子の李氏皇族に対する擁護に関わる問題なのである。太平公主と玄宗は、このような信仰上の危惧を共有していたと思われるのである。

第三に、こうした死者の安寧をはかるとなれば、經典とその朗誦や写経、そして道教經典の学習は必ず正しくおこなわれなければならない。そのような認識が彼らにはあったと思われる。もともと三十六部の『一切道經』は、敦煌本 S. 1513 「一切道經序」によれば、太子李弘が上元二年（六七五）に病没したのを哀悼して、高宗の勅命で編纂されたのであった。つまり、『一切道經』は太子の追福が目的である。そして、『一切道經』に音義を制作するのは、これまでに蛇足を加えたり、伝写の誤りを犯したり、間違った説を採ったりしたのを訂正しなければならないからである。『一切道經音義妙門由起』序で史崇らはつぎのように述べている。

而經且久遠、字出靈聖、梵音罕測、雲篆難窺、或爲無識加增、或爲傳寫妄誤、或持浮僞之說。

ここで「梵音」というのは、サンスクリットの発音のことではなく、張萬福が⑨で述べていた「雲篆」の発音、つまり「大梵隱語」や「五方真文」の音のことである。「字出靈聖」というのは、『元始无量度人上品妙經』によれば、こうした雲篆はもともと天真真人という聖人が筆を執って書いたものだと言われていたからである。当時の黄籙齋では、親族の死者が天の南宮で身体を錬り直し、新たな身体を獲得してから天界に昇仙する儀礼をおこなっていた。そのときに、これら雲篆で書かれた文字を石に刻して墓穴の五方向（東西南北中央）に配置した。『一切道經音義』の事業にもっとも近い例は、景雲元年（七一〇）十一月の中宗の埋葬でおこなわれたもので、そのときの刻石が定陵から出土している<sup>45</sup>。この刻石の雲篆は「大梵隱語」ではなく『五鍊經』、『道藏』の『太上洞玄靈寶滅度五鍊生戸妙經』の「中央天文」である。この雲篆は張萬福の著作⑩『靈寶五鍊生戸齋儀』にみえる翻訳文と一致している<sup>46</sup>。このことから、毒殺された中宗の身体「錬度」（身体の練り直しの儀礼）は、張萬福ら当時設置されたばかりの太清観の道士によっておこなわれたと思われるのである。また、玄宗と太平公主の母親である昭成皇后の場合は、韋后らに殺されたあと、亡骸が見いだせなかったという<sup>47</sup>。その昭成皇后の埋葬には、新たな身体を錬るための儀礼が重要な役割をしたことが想像される<sup>48</sup>。そのときに使われた雲篆の刻石も出土している<sup>49</sup>。こうした儀礼における雲篆や經文の誤写は、玄宗と太平公主の肉親の死後に直接的に関わる重大問題であり、必ず正されるべきなのである。

『一切道經音義妙門由起』序にみえる長安の道観で、本稿において議論できなかったものに玄都観・宗聖観、洛陽の福唐観、絳州の玉京観がある。このうち後二者は史料が乏しいが、前二者は史料が多く、これら道観と関係する道士についてはあらためて論じたい。

- 1 玄宗「一切道經音義序」『一切道經音義妙門由起』の巻頭にみえる。『道藏』第二四冊七二〇頁（文物出版社影印本）。『一切道經音義』の編纂は、先天元年（七一二）八月から十二月の間と考えられる。雷聞「唐長安太清觀與『一切道經音義』的編纂」による。
- 2 雷聞「唐長安太清觀與『一切道經音義』的編纂」『唐研究』第十五卷、二〇〇九年、一九九〜二六頁。
- 3 雷聞氏の「唐長安太清觀與『一切道經音義』的編纂」でもまとめられている。
- 4 『長安志』は畢沅校正の民国二十年鉛印本『中国方志叢書』により、李健超『增訂唐兩京城坊考』（修訂本）三秦出版社、二〇〇六年を参照する。
- 5 『長安志』一七三頁。李健超『增訂唐兩京城坊考』（修訂本）六九頁は「宋王元禮」を「徐王元禮」に作る。『唐会要』卷五十では「太平觀 大業坊。本徐王元禮宅。太平公主出家、初以頌政坊宅為太平觀、尋移於此、公主居之。時頌政坊觀改為太清觀。」とする。
- 6 「大業崇福觀」を李健超『增訂唐兩京城坊考』（修訂本）は「大崇福觀」に、「開元一十七年」を「開元十七年」に作る。
- 7 同様な記事は『唐会要』卷五十にもみえるが、昭成觀の命名の年次を「開元一十七年」に作る。私見では、「唐故昭成觀大德張尊師墓誌銘并序」（周紹良主編『唐代墓誌彙編』上海古籍出版社、二〇〇七年、一四九三頁）によると、昭成觀の大徳だった張若訥は開元二十七年五月十三日に昇天している。開元二十七年のこの日までに昭成觀と命名されたと考えられるよりは、その十年前の開元十七年に昭成觀と命名されていたと考える方が蓋然性は高いように思われる。
- 8 『唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳』大正藏No.二〇五四、二八一頁下「廣樹福田度人、則擇上達僧捨宅、乃成太原寺。」
- 9 『舊唐書』卷一八三「外戚伝」四七二八頁は、榮国夫人の卒年を咸亨二年に作っているが、太平觀と太原寺の相関からいって、咸亨元年とするのが是である。
- 10 『舊唐書』卷一八三「外戚伝」四七三四頁「廢休祥宅、於金城坊造宅、窮極壯麗、帑藏爲之空竭。」



- 11 『佛祖歷代通載』大正藏No.二〇三六、七二九頁中。
- 12 『資治通鑑』胡三省注「聖善寺蓋為武后資福取母氏聖善之義。」母氏聖善は『詩經』国風の「凱風」の詩句による。ちなみに、同じ胡三省注に引く『唐會要』によれば、長安の聖善寺は章善坊にあり、神龍二年に中宗が則天武後の追福のために建てたといふ。
- 13 『書小史』は『景印文淵閣四庫全書』臺灣商務印書館、第八一四冊に所収、二一四頁。
- 14 『大宋僧史略』大正藏No.二二二六、二四四頁下。
- 15 『朝野僉載』、『太平広記』卷二八八、中華書局校点本二二九二頁。
- 16 『冊府元龜』卷五三、鳳凰出版社、五五七頁（景雲）二年正月、加銀青光祿大夫行太子率更令史崇玄為金紫光祿大夫太清觀主。」
- 17 『傳授三洞經戒法籙略説』、『道藏』第三二冊一九六頁。
- 18 『新唐書』卷八三、三六五六頁「又方士史崇玄爲師。崇玄本寒人、事太平公主、得出入禁中、拜鴻臚卿、聲勢光重。觀始興、詔崇玄護作、日萬人。」
- 19 『丹鉛餘録』は『景印文淵閣四庫全書』第八五五冊四五二頁に所収。
- 20 島一「金仙・玉真二觀の修營問題と玄宗の『道德真經』注疏」、『立命館文学』第五四四号、一九九六年。
- 21 『新唐書』卷八三、三六五七頁「金仙公主始封西城縣主。景雲初進封。太極元年、與玉真公主皆爲道士、築觀京師。……羣浮屠疾之、以錢數十萬賂狂人段謙冒入承天門、升太極殿、自稱天子。有司執之、辭曰、崇玄使我來。詔流嶺南、且勅浮屠、方士無兩競。太平敗、崇玄伏誅。」
- 22 雷聞「唐長安太清觀與《一切道經音義》的編纂」はこの事件について、『老子化胡經』が中宗以来禁じられていたにもかかわらず、史崇が化胡の論理を使って仏教をおとしめていたことに原因があるとする。
- 23 『吉岡義豊著作集』第三卷、五月書房、一九八八年。音韻学的研究に、汪業全「史崇玄（一切道經音義）考」、『広西師範大学学报』第四〇卷第二期、二〇〇四年、七一〜七四頁。

- 24 『通志』巻六八に「史崇注天文十二次圖一卷」、同巻に「十二次二十八宿星占十二巻」、史崇撰、「新唐書」巻五九の「史崇十二次二十八宿星占十二巻」とあるのは同じ本であろう。ただし、汪業全氏は史崇玄と別人の手だとみる。
- 25 張萬福が立ち会った金仙・玉真二公主の入道儀礼については、Charles D. Benn, *The Cavern-mystery transmission: a Taoist ordination rite of A.D. 711*. University of Hawaii Press, 1991. 丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』第三部第一章「張萬福の道教儀礼学と唐代前半期の道教界」汲古書院、二〇〇四年。以前の拙稿でも議論したが、本稿で改めた部分がある。土屋昌明「開元期の長安道教の諸問題—金仙・玉真公主をめぐる」『日文研叢書四二』古代東アジア交流の総合的研究』二〇〇八年十二月、三六五〜三九五頁。
- 26 『福井康順著作集』第二巻、法藏館、一九八七年、三五五頁。もと『東洋思想史研究』一九六〇年。
- 27 王承文『敦煌古靈宝経与晋唐道教』北京：中華書局、二〇〇二年もそれに従っている。
- 28 土屋昌明「金仙公主の墓葬からみた玄宗期長安道教の文字観」『國學院中国学會報』第五十七輯、二一〜三八頁、二〇一二年三月。
- 29 シェール氏らの『道蔵提要』では、当該書を宋代以降の項目においており、その項目を担当するラガウェイ (John Lagerwey) 氏は、初唐の影響を考慮しつつも南宋の道教儀礼書との関連を指摘している。Kristofer Schipper and Franciscus Verellen, *The Taoist Canon: An Historical Companion To The Daozang*. University of Chicago Press, 2005.
- 30 『道蔵』第二四冊七二二頁。
- 31 土屋昌明『神仙幻想—道教的生活』春秋社、二〇〇三年、七五〜七七頁。
- 32 雷聞「唐長安太清觀與《一切道經音義》的編纂」二一七頁。
- 33 丸山宏氏は前掲書で、張万福は先天二年(七一二)ころに五〇歳以上の年齢だったと推定、かつ直後の史崇玄の謀反に関わって、誅殺された蓋然性が高いと考え、生存年代をかりに六五〇?〜七一三?としている。
- 34 賈梅「唐東明觀「孫思邈誌」考釋」『碑林集刊』第十輯、陝西人民美術出版社、二〇〇四年、五〇〜五六頁。

- 35 「岱嶽觀碑」陳垣『道家金石略』文物出版社、八一頁。
- 36 『法苑珠林』中華書局、周叔迦ら校注本、一六七五頁。
- 37 砂山稔『隋唐道教思想史研究』平河出版、一九九〇年、二四六頁。
- 38 『集古今佛道論衡』大正藏No.二一〇四、三八九頁下。
- 39 雷闡氏が東明観についても史料を整理しているほか、拙稿（二〇〇八年十二月）でも述べたことがある。
- 40 この『経』とは、おそらく『思微定志経』であろうが、『無上秘要』卷三四や卷四六に載せる『洞玄思微定志経』の引用には本文はみえない。また『思微定志経』に関係すると思われる『道蔵』の『太上洞玄靈寶智惠定志通微経』にも本文はみえない。「思微定志」による「入定」は『太上一乗海空智藏経』の強調するところである。
- 41 『資治通鑑』卷二一〇、六六五九頁。
- 42 丸山宏前掲書、四二七頁。
- 43 『歴代崇道記』『道蔵』第十一冊二頁では、乾封元年（六六六）の封禪のあと、太宗及び文德皇后のために東明観を京師につくつたともいう。
- 44 李健超『増訂唐兩京城坊考』二四四頁。
- 45 姜捷「關於定陵制的幾個新因素」『考古与文物』二〇〇三年第一期、六九〜七四・八三頁。
- 46 土屋昌明「開元期の長安道教の諸問題」（注二五）
- 47 『舊唐書』卷五一、二一七六頁「長壽二年、爲戸婢團兒誣譖與肅明皇后厭蠱咒詛。正月二日、朝則天后於嘉豫殿、既退而同時遇害。梓宮秘密、莫知所在。睿宗即位、諡曰昭成皇后、招魂葬於都城之南、陵曰靖陵。」
- 48 雲篆の刻石の墓主は非業の死を遂げた者が多く、その死後の安寧を祈願する動機があると思われる点は、加地有定氏の意見に賛意を表する。加地有定『中国唐代 鎮墓石の研究 死者の再生と崑崙山への昇仙』かんぼう、二〇〇五年。
- 49 こうした刻石については張勛療・白彬『中国道教考古』線装書局、二〇〇六年を参照。

※ 本論は平成二十一、二十二年度専修大学研究助成「道教文化研究の諸相」の成果の一部である。